天眼鏡

究極の味、「自然はおいしい」

年が明けて少し間を置いた頃に、小野龍光・香山リカによる対談『捨てる生き方』(集英社新書) なる本を読んだ。たまたまfacebookの「友達」でつながる酪農家・中洞（なかほら）正さんが、この本の中で自分が取り上げられているので、ということで紹介しておられ、書名も気になって購入してみたものだ。

香山リカ氏は精神科医で、新聞の人生相談欄等でよく名前を見かけていたが、数年前に東京を引き払って北海道・穂別に移住して僻地医療に取り組んでいるという。一方の小野龍光氏はまったく存じ上げなかったが、投資家で起業家、年商100億円を超えるIT企業のCEOをつとめていたところが、インドを旅する中で、「インドで仏教を牽引する日本出身の僧・佐々井秀嶺上人のもとで突如仏門に入り、資産、社会的地位、名声を捨てた」方である。実業の世界に入る前は、東京大学で生物学を学び、同大学院理学系研究科生物科学専攻を修了したというのも気を魅かれた理由の一つかもしれない。

章立てを取り上げておけば、プロローグ「龍光さんはなぜすべてを捨て得たのだろうか」、第1章「すべてを捨ててなぜ私は仏門をくぐったのか」、第2章「あるがままに生きるということ」、第3章「現代人をつらくしている執着や欲について」、第4章「とらわれを捨てれば、けっこう楽に生きられる」、第5章「森羅万象の共生を考える―人は利他を生きられるか―」、エピローグ「限られた時間をどう生きたいか、問い直してみる」となっている。

随所に心に訴えきらきら光る言葉が散りばめられているが、「そのままあるがままを受け取る。水は高いところから低いところに流れ、雲は形をつくってはまた消えていく。それぞれ無数ともいえるさまざまな縁の影響を受けつつ、ただそのようになっていく。そんな考え方でしょうか。今回の「捨てる」というキーワードを使って言うのであれば、自分のすべてを選択してコントロールできるという錯覚へのとらわれ、それを捨てる」ところに本書の核心はある。そしてそこに至る理由・過程について「リーマンショックで凹んでも、それでもまだ、金融市場は膨張をし続けていく。そこに突如3.11の東日本大震災が起こった。科学技術が進歩し、どれだけ世の経済指標が拡大しようが、人類は自然の前でいかに無力なのか、本当にちっぽけであるのかという事実を知らしめられた。経済や技術の発展からの驕りで、人は自然を軽視し過ぎていたのではないのか。もう少し人間の自然界での位置づけを謙虚に見つめ直すべきではないか。」と語る。

そうした中で、岩手県岩泉町で山地酪農に取り組む中洞氏は小野氏が「前世において（出家する以前；筆者注）唯一、メンター（助言者）になっていただいた」方だそうだ。本書の中で中洞氏が語った言葉、「本当に人間が幸せを感じられる食べ物というのは、幸せに生きた生き物からからいただけるものだ。ほとんど一生動けないような、ふん尿まみれの牢屋のような狭い場所につながれている牛が、おいしいものをつくってくれるのか、人間が心身健やかになれるものをつくってくれるのか。牛らしく、当たり前に自然のなかで幸せに生きた牛だからこそ人間にとってもうれしい、おいしいものが生まれるのではないか。」を紹介している。まさにアニマルウェルフェアの本質をつく話であり、本当のおいしさは自然が生み出すものだという“真実”を見すごすことは許されないと受け止めた。農業・畜産の産業化の進行にストップをかけることは現実的ではないが、本当のおいしさは健康と一体でもあり、これは自然を大事にするからこそ生み出されることは農業・畜産の基本であり、これを絶対的に重視していくことが持続可能性にもつながるものと考える。

（農的社会デザイン研究所　代表　蔦谷栄一）